

大川小校舎:やっぱり残したい… 6 卒業生の訴え広がる

毎日新聞 2014年12月04日 20時54分 (最終更新 12月04日 20時56分)

被災した校舎を未来に残したい――。東日本大震災の津波で児童・教職員計 8 4 人が犠牲となった宮城県石巻市立大川小学校の卒業生 6 人が 6 日、東京で開かれる「子どもの権利条約批准 2 0 周年記念集会」で、校舎保存を望む意見を表明する。友達や妹を亡くした悲しみを乗り越え、「大川小で起きたことを忘れないで」との願いを届ける。【百武信幸】

◇ 6 日、東京で意見表明

悲劇を伝える被災校舎には今も多くの人が訪れる。だが「見たくない」との住民の声も根強く、石巻市は保存を決めていない。震災当時小学 5 年～中学 2 年だった 6 人は「悲劇を繰り返さないために残すべきだ」と考え、今年 4 月以降、毎月 1 回の話し合いを重ねてきた。

卒業生たちは、学習支援を受けてきた仙台市の N P O 「ここねっと発達支援センター」が同市内で開いた 4 月の発表会で、「校舎保存」を表明した。多くの激励を受けた一方、「残したくない人の気持ちが分かっていない」「大人に言わされている」という批判もあったという。

このため 1 0 月に石巻市大川地区の住民と直接話し合ったところ、保存に消極的だった男性が「皆さんの言葉には説得力がある。一生懸命がんばって」とエールをくれた。若い世代の発信に少しずつ理解が広がっている。

震災当時大川小 6 年だった高校 1 年の浮津天音（うきつ・あまね）さん（1 6）は「自分たちの声なんて小さいから、何かが変わることはないと思っていた。大川小を少しでも分かってくれる人が増えたと実感し、まだ知らない人も多いことに気づいた」という。

「広島原爆ドームも、動いた人がいたお陰で残されたと聞いた。誰かが言わないと変わらない」。浮津さんは自らを奮い立たせる。小 6 の妹みずほさんを亡くした高 3 の佐藤そのみさん（1 8）は「校舎を残すかどうかでも大事だけど、大川小はすてきな場所だったこと、悲しいことがあったことを伝えたい」と話している。子どもの権利条約批准 2 0 周年記念集会は、東京都渋谷区の青山学院大で 6 日午後 2 時から。



被災した校舎を残すために直接話し合う地元住民と大川小の卒業生ら＝宮城県石巻市で 2 0 1 4 年 1 0 月、佐々木順一撮影